明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容について

飯田町・番町への牧場移転集中を例として

ON THE TRANSFORMATION OF TOKYO URBAN SPACE THROUGH THE CONVERSION OF
FORMER RETAINER RESIDENCES INTO DAIRY FARMS IN THE EARLY MEIJI PERIOD:

A case study of dairy farms in Iidamachi and Bancho

金谷 匡高^{*1}

Masataka KANAYA

This paper traces the transformation of former retainer residences in Tokyo after the Meiji Restoration, focusing on urban change resulting from the rapid spread of the dairy farming in the center of the city during the early Meiji Period. Analysis of land acquisitions and the location of dairy farms reveals that the most favorable sites for the introduction of the dairy industry were the relatively large residences of former shogunal retainers (*Hatamoto*). In addition, by analyzing the dairy farms drawn on the engraving, we consider space of the former samurai estates in the early Meiji period.

Keywords : Tokyo, Dairy farms, Landowner, Bukechi, Early Meiji period, Urban space

東京, 牧場, 土地所有, 武家地, 明治初期, 都市空間

1. はじめに

本稿の目的は、幕府瓦解後の明治初期に都市部で誕生しかつての大名屋敷跡や旗本屋敷跡に増加する搾乳業に焦点を当て、東京の都市空間にどのように牧場が受容され変遷していくのか、その土地取得の過程を調査し、明治維新以降の都市空間の変遷を明らかにすることである。

日本の搾乳業は、明治初期の都市部にて急発展し、その後農村部の酪農に派生していったといわれており、欧米における搾乳業とは逆の発達過程をたどっている¹⁾。さらに、1900(明治33)年における東京の搾乳業者数は、市部で174軒、郡部で155軒、乳牛頭数は市部が2058頭、郡部が1499頭と全てにおいて市部のほうが郡部よりも数を上回っていた。また、市部の請売業者数は447軒にも上っている²⁾。その後、1900(明治34)年頃を期に牧場の郊外化が起こり郡部への移転がみられるが、その後も東京の搾乳業者は増え続け、組合員数の統計からみると1927(昭和2)年前後をピークに減少していく³⁾。しかし、以降も東京市の搾乳量は増加し、消費量も増加する傾向にあった。その東京の搾乳業者の減少の主な要因となったのは、「農乳と大商業資本の挟撃に依るもの」⁴⁾であった。それまでは加工乳製品の製造が専門であった森永や明治が多くの小搾乳業者を買収し農乳を市乳化したためによるものという。

本稿では、明治の転換期に旗本屋敷の多くが上地された後、土地所有者が変遷し搾乳所が開業する様子に着目し、その土地空間利用の変化を辿っていく。特に江戸期中上級の旗本が多く居住した番町・飯田町周辺に明治5(1872)年頃より搾乳所が集中する様子に焦点を絞り研究を行った。1878(明治11)年の『東京府統計表』⁵⁾に46

軒の府内の搾乳所の住所が記載され、区ごとに分類を行うと麹町区、下谷区、芝区が共に6軒と多かったことがわかる。搾乳所の所在地は1881(明治14)年で統計がなくなるが、1883(明治16)年の『東京府統計書』⁶⁾からは各区分別の乳牛数の統計が現れ、明治16年の乳牛数は、麹町区が114頭と一番多く、次ぐ京橋区が71頭、芝区が69頭となっている。京橋区と芝区にはそれぞれ搾乳業の草分ともいえる前田源太郎の搾乳所が新富町に、前田留吉の搾乳所が芝新銭座にあったことが理由と考えられる。同様に麹町区にも草創期の搾乳所が集まり、特に番町・飯田町エリアに集中していた。麹町区には明治初期の土地所有を把握できる比較的多くの資料が残されており、本論では当地域に焦点を絞り研究を行う。江戸期における飯田町・番町は幕末まで中上級の旗本が多く居住した地域であり、明治期になると政府官員が多く居住したエリアとして知られている⁷⁾。

また、後述するが、明治中頃までの搾乳所は敷地内に放牧場があり牧場を兼ねていた。本論で用いる搾乳所、牛乳搾取所という用語は基本的には放牧場を兼ねたものを指している。

搾乳業者達がどのように土地を取得し利用していくのか探ることで、官員住居として利用された旗本屋敷という認識とは別の側面から詳細な分析を行う。

さらに、搾乳所の経営には旧幕臣が多く関わったといわれている⁸⁾。明治維新に際して、幕臣の多くは職を失い、駿府へ帰藩した⁹⁾。朝臣となれば東京にそのまま居住が許されたが、多くが徳川家と共に駿府へと渡り、朝臣となる者、帰農帰商する者はその一部であった¹⁰⁾。3万人以上いた旧幕臣の内、最後まで東京に残った者は、朝臣となった者と帰農帰商した者合わせて6000人程であったとされ

^{*1} 法政大学デザイン工学部建築学科 教務助手・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng. & Design, Hosei Univ., M.Eng.

る。そのような、旧幕臣の事業の中で、東京で成功を収めていた職業の一つが牛乳搾取業といわれている¹¹⁾。

明治維新以降、上記の理由で相当数の幕臣屋敷が空き家となり、次第に多くの政府官員が居住するようになる。東京の武家地は明治政府に上地され、その後必要に応じて徐々に払い下げられていく¹²⁾。番町飯田町地域においても、政府官員などが拝借していた住居は明治5(1872)年7月以降、低価にて払い下げられ、追うようにして旧幕臣屋敷跡に明治5(1872)年頃から搾乳所が集まるようになった¹³⁾。結果を先に述べると、明治初期の搾乳業は、旧幕臣が生計を立てるために始めた事業だけではなく、政府官員がその家令や親族を代理として土地取得を行い、牧場経営を行っている様子がみえてきた。また、農家出身者が旧武家地において牧場経営を行う事例もある。搾乳業とその土地取得に関し言及している研究は管見では見当たらない。

2. 既往研究

まず、松山恵氏による近代東京の都市史研究¹⁴⁾は、明治初期の東京市中の都市空間を「郭内」と「郭外」に分け、明治政府が範囲の拡大縮小を意図的に行う様子から「郭内」を新政府の政治的利用空間、「郭外」をそれ以外の空間とし、「郭外」では明治初期に空洞化する旧幕臣屋敷地に町人層が移転し新開町を開く様子を明らかにするなど、武家地空間が官民の思惑により利用される様子を明らかにした。その議論を踏まえると、加藤仁美氏の研究は、旧藩主が明治期の「郭外」において広大な旧大名屋敷地を桑茶令により耕作地化し、やがて宅地経営へと転換していく様子を丁寧に描いている。一方で、「郭内」の空間変遷については官庁街や公家・官員住居へ利用されたという内容にとどめている。本論では飯田町・番町という「郭内」域における旧旗本屋敷地の空間が搾乳業へと利用される過程に焦点を絞る。歴史学の分野から幕末期にこの地域に居住していた旗本を含む旧幕臣の明治以降の動向が近年明らかになっている¹⁵⁾。

次に、明治期における東京の搾乳業に関する具体的な研究として、社会学の武田尚子氏による研究があげられる。武田氏は、官有資源の乳牛や搾乳設備を民間資本に払い下げることにより搾乳業が発展する様子を渋沢栄一の出資した「耕牧舎」を例に解明した¹⁶⁾。また、個人の研究者による成果もみられる¹⁷⁾。矢澤好幸氏の研究は東京の搾乳業を通史として描いており、明治初期の搾乳業の血縁に頼った家族経営的な傾向を描き出している。農業史や畜産史のなかで搾乳

業に関して取り上げたものには『東京農業史』¹⁸⁾、『日本畜産史』¹⁹⁾があげられる。どちらも農業、畜産の通史としてその1節の中で東京の搾乳業を取り上げているのみで新規の事実はみられない。

さらに、大正、昭和初期に地理学の分野で小田内通敏や青鹿四郎が当時の市乳業の拡大する様子とさらなる郊外化について統計と考察を行っている²⁰⁾。これにより、当時の搾乳業の様子を統計的に知ることができる。しかし、これらの統計は大正期以降のものであり、その頃の搾乳業は1900(明治33)年の牛乳営業取締規則の強化により、多くの牧場が市外への移転をした後のことである。本稿では市外へ移転する前の様子を描き出すことを目的としている。また、その移転箇所は小田内通敏によれば「甲州街道青梅街道・中山道等重要道路に近き地点を選べるもの多し」という。河川や上水沿いに移転する例が多く今後この記述についても再検討が必要かと筆者は考えている。

3. 研究方法

本稿では、明治初期の資料的な制約もあるが地券帳や古地図、銅版画などを基にして飯田町・番町の旗本屋敷空間が搾乳所として維新後にどのように取得され、扱われていくのか描き出そうと試みる。主に1873(明治6)年の沽券図²¹⁾(以下、「沽券図」)と1878(明治11)年の飯田町・番町周辺の地価取調帳²²⁾を比較することで、牧場となった場所の土地所有者の変遷を把握し、1884(明治17)年の参謀本部によって描かれた迅速地図²³⁾(以下、『参謀本部地図』)により都心部の牧場空間を捉える。また、1885(明治18)年に出版された『東京商工博覧絵』²⁴⁾に掲載された340点余りの商店等の銅版画のうち、搾乳業の広告を出している者が20軒みられた。これらの広告には当時の旧武家地における搾乳業の姿が描かれており、明治期の搾乳業の空間把握を行うための重要な資料となる。

こうして、搾乳業草創期の土地取得や経営主体をみていき、さらに敷地内に建つ建築の特徴を読み込むことで、明治初期の飯田町・番町における幕末からの土地空間の変容を把握する。つまり、官員住居として利用されたとされる当地域を民間開発や私的な面からも明らかにしていきたい。

明治初期の搾乳業者を知ることが出来る資料としては『大日本牛乳史』²⁵⁾(以下、『牛乳史』)と『日本牧牛家實伝』²⁶⁾(以下、『牧牛家』)があげられる。『牛乳史』はその名の通り日本の牛乳史を通史としてまとめた書籍であり、本論で度々引用する「乳業者名鑑」の項は『牧

Table1 History of Dairy Farm Relocation

搾乳業者名	開業期：明治5年頃	飯田町・番町発展期：明治10年代	郊外牧場設立期：明治30年代まで
阪川牛乳 阪川當晴	住所1:赤坂の自邸(明治3年5月18日に設立か) 住所2:四谷塩町3丁目37番に移転, 明治4-5年, 阪川當晴*2	住所3:麹町五番町17番地に移転, 明治5年7月, 阪川當晴*2 (住所2はそのまま保有)*1→住所3:明治34年廃止	住所4:代々幡村大字幡ヶ谷字南原に移転, 住所3と四谷区霞ヶ岡町14番地の搾乳場・飼育場を廃止, 明治34年12月*1. 麹町3丁目7に販売店, 借地
猪股要助 (猪股組)	住所1:河瀬秀治の厩にて開業, 明治4年7月,*1 住所2:荏原郡駒場村(旧御用屋敷跡), 明治5年8月*1	住所3:飯田町3丁目18番へ移転*1, 明治6年4月, 羽倉信度*2 住所4:下総小金原に牧場開設, 明治8年4月 住所5:富士見町5丁目7番地にて独立*1, 明治9年, 河瀬秀治*3 住所6:富士見町4丁目12番地へ移転, 明治11年10月3日土地分割, 猪股要助*4 住所7(支店):四谷区永住町1番地に開設, 明治11年7月	住所8(支店):高輪南町30番地に開設, 明治12年1月(以下*6) 住所9(支店):本郷区真砂町23番地に開設, 明治14年5月 住所10(支店):牛込区笹笥町38番地に開設, 明治14年8月 住所11(支店):北豊島郡金杉村273番地に開設, 明治18年2月 明治22年7月6日:住所6から住所7へ移転, 住所6を廃止 (『読売新聞』1889(明治22)年7月6日号)
長養軒 松尾臣善	住所1:南神保町1番に開設, 明治6年5月25日, 松尾臣善*2	住所2:飯田町5丁目9番地(30番地)の土地を購入, 明治8年, 松尾しげ*3 →所有者変更, 明治11年, 松尾臣善 代理松尾健次*4 →明治13年に住所2へ転居広告掲載(『読売新聞』1880(明治13)年5月18日)	その後の移転先は不明。大正7年の案内本に長養軒が現れる。錦町1丁目に盛大なる販売店、第1牧場を駒込富士前町、第2牧場を板橋町に設ける。「明治5年に錦町の同地に始める」の記載があることから関連会社*7
北辰社 榎本武揚 前田喜代松	住所1(北辰社):神田猿樂町に開業*1, 明治6年頃 住所1'(前田):芝桜川町の前田留吉を頼る*1明治5年 住所2':築地に牧牛舎開設, 明治8年	住所3'(住所1'):神田猿樂町に移転, 明治10年*1(住所1カ) 住所2(4'):飯田町3丁目4番地イ乙(9番地)の土地取得, 明治8年, 榎本武揚*3 →明治14年に飯田橋の榎本の邸を譲り受ける*1	住所3(5'):高田村元高田1476番地, 明治22年, 前田喜代松*8 住所4', 5'ともに明治45年時も前田喜代松所有地。*9
英華舎 山縣有朋 平田貞次郎		住所1:三番町20番地, 設立年不明, (明治13年「東京府統計表」より現れる) 住所2(支店):数寄屋町4番地*5 住所3(牧場):雑司ヶ谷35番地*5	住所4:南豊島郡内藤新宿町元3丁目26番地, 明治21年表記は「英華社」となっており、代表は荒井伊右衛門。*10

牛家』からとられたものが大きいと考えられる。本論では、これら2つを主な明治以降の搾乳業の通史の資料として用いた。

4. 幕末期江戸における牛乳搾取業

江戸期の府内における搾乳所は、寛政5(1793)年に徳川家斉が白牛酪を嶺岡から取り寄せる手間を省くため、雉橋の御厩へ白牛10頭を飼養していたのが嚆矢であり管見では唯一である²⁷⁾。この御厩が明治以降も搾乳所として存続することは後述する。その後、横浜が開港し、居留地近くで搾乳所が開かれるようになる。幕末期には牛乳飲用の関心が高まっていることが慶長3(1867)年に出された蘭学者の石川桜所、伊東貫斎、松本良順らの以下の建白書から伺える。

「今度醫學所江御預ヶ相成候白牛之儀、(中略)是迄房州二於而御牧羊其内哺乳之牛のミ江戸表江取寄白牛酪製法相成居候處往來之諸入用も相掛り且遠隔之地二而は新鮮之牛乳多分ニ難得諸事不便二候間江戸近在駒場野廣尾白銀目黒等之内水利之便地相撰ひ、拝借奉願右江引移候積二候」²⁸⁾

医学所で預かりになっている牛の飼育場所に関する願いであるが、江戸中心部は屋敷地として埋まっていたため、近郊の水利の良い土地を候補としてあげたと考えられる。さらに、「徳丸、戸田原、小金原、那須野等不毛の曠野悉く牧場となし」と言い、牧場経営をして幕府財政を建て直すとしている。これらの土地は、幕府の天領であり、その後の明治政府による土地利用は必然的であるが、このうちの2箇所が明治以降に開墾され牧場となっている²⁹⁾。

5. 明治初期の東京における牛乳搾取業

明治初期の資料として、はじめて東京の搾乳業者や牛の頭数が把握できるのは明治3(1870)年頃であり、『牛乳史』³⁰⁾にはその頃の搾乳業者は5軒で、その総乳牛数も15頭ほどとある。その5軒はそのまま抜き出せば、雉子橋外の御厩の吉野文蔵、下谷の辻村義久、麴町五番町の阪川當晴、木挽町越前屋守川、築地水町ヶ原の水原牧場

であるという。だが、これらの所在地も始めは流動的で、設立の年代についても同書内で若干の誤差がある。この中で、吉野と水町は雉橋の御厩から牛馬会社の流れを汲んだ者で、由利公正がその発展に寄与している³¹⁾。辻村と阪川は旧幕臣であり、その後の東京の搾乳業を拡大させた人物である。この5軒をきっかけに次第に搾乳所は増加し、飯田町周辺にも集まるようになる。Fig.1³²⁾は明治初期に創業し明治10年代に飯田町、番町周辺に集まってきた比較的大きな搾乳所6軒について1885(明治18)年時の所在地をプロットした地図である。また、これらの搾乳所は飯田町に移転する前に別の場所で開設されたものが多く、その経緯と土地所有者や移転年について把握できる範囲で表にした。(Table1³³⁾) 本項では、これらを元に通史としての搾乳業史と照らし合わせながら草創期の牧場について取り上げ、各搾乳業者の土地取得過程についてみていきたい。全体の様子を把握するためにも各搾乳所について個々に述べていく。

まずは、搾乳業の草分けの一人である阪川當晴である。幕臣だった阪川は、維新後に選択を迫られ朝臣となることを決めた一人である。しかし、明治4(1871)年、民間に下ると和牛1頭洋牛1頭を買い、赤坂の自宅に店を開いた。その後、四谷右京町に移り、明治5(1872)年7月に麴町五番町17番の地に移ったとされている³⁴⁾。「牛乳史」にはその前後についての記述があり、明治3(1870)年5月18日に「松本順、赤松則良、佐藤尚中、林洞海、その他7,8名の諸大家と結社し牛乳搾取営業を創立した」とあることから、幕府方の医師達が設立に関与していることがうかがえる。特に松本は明治期に牛乳飲用を広めた人物であり、彼らは幕末期から牛乳飲用を謳っていた³⁵⁾。『肉と乳』³⁶⁾に彼らは「牛乳商社」を興したとあり、実際の経営は阪川が行っていたことが述べられている。「沽券図」には五番町の住所だけでなく四谷塩町3丁目³⁷⁾に阪川當晴の名が登記されており、移転前の地も所有していることがわかる。

明治5(1872)年以降次第に搾乳業社が増加し、この頃から飯田町周辺へ牧場が集中して行く様子がうかがえる。小田内の『帝都と近郊』では、明治5(1872)年の搾乳業者は市内に14戸あるとしている³⁸⁾。また、『牛乳史』には、「明治九、十年頃には搾乳業者も一層増加」したとあり、その理由は廃藩置県が行われ、さらに秩禄処分により仕事をしなければ生活が出来ない士族が搾乳業を多く始めるようになったことにあるとしている³⁹⁾。

次に、猪股組で知られる猪股要助は『牧牛家』によれば、嘉永5(1852)年に越後国頸城郡真木村の農家の家に次男として生まれた。明治になり東京へ出て来ると役人の家を転々とし、明治4(1871)年7月に河瀬秀治の執事となった。そして、河瀬の厩で洋牛一頭を飼ったという。明治5(1872)年8月になり荏原郡駒場村の旧御用屋敷跡に店を開き、1873(明治6)年4月に荏原郡から飯田町3丁目18番地に牧場兼搾乳所を移している。

さらに、1875(明治8)年に下総の小金原に移すが、「地味風土の畜殖」に適さないことから富士見町4丁目12番地の飯田町周辺へと戻ってきたとされる。さて、『京浜実業家名鑑』⁴⁰⁾という書籍に掲載された猪股の項をめくると、1876(明治9)年に富士見町にて「独立」とあり、それまでは勸業権頭の河瀬秀治のもとにいたとある。そして、それまで猪股の経営していた富士見町5丁目7番地の地主は1878(明治11)年の時点でも河瀬⁴¹⁾であったことがわかる。彼は旧宮津藩士で、1876(明治9)年の官員録では勸業頭となっている。明治

Fig.1 Dairy farm locations in the Iidamachi and Banchō area, ca.1885.

11年の「地価取調帳」で富士見町4丁目12番地をみると「明治十一年十月三日分割」とあり江夏千城の土地を猪股が分割して手に入れたことがわかる。分割時の所有者は「沽券図」と比較すると既に別の人物だったことが読み取れる。さらに、当時の『読売新聞』⁴²⁾の広告に、「是迄富士見町五丁目七番地借地本業相替候處今般同町四丁目十二番地買得其筋に於て御検査の上へ御允許を蒙り」とあることから、地借から地主へこの時期になったことが読み取れる。さらには、この文から小金原に移転した時も、借地にて富士見町にて営業を続けていたことが推察できる。つまり、河瀬が搾乳業開業に関わっており、猪股は実質の経営を行っていた。その後は、1888(明治21)年9月7日⁴³⁾に猪股が逝去し、翌年7月6日⁴⁴⁾に「狭隘不便」の理由から支店であった四谷永住町1番地へと移転した。

三軒目は1873(明治6)年に神田猿楽町で開業したとされている北辰社である。北辰社は、『牛乳史』では榎本武揚、大島啓介、松平太郎の共同経営で野田という者が支配したとしている。しかし、『牧牛家』には北辰社は1877(明治10)年に前田喜代松が猿楽町の土地700坪を手に入れ、洋牛7頭をもって独立したとあり創業に関しては不明瞭なところもあるがともに猿楽町の住所を述べていることから二者の関係性は窺える。同年7月の前田の広告には「北辰社」の名は無く、前田喜代松の個人の名で「猿楽町三丁目一番地」の記載がされている⁴⁵⁾。1876(明治9)年8月の広告⁴⁶⁾には北辰社の住所は飯田町の榎本と同じものとなっており、「明治14年に(中略)榎本武揚の邸を譲り受け」⁴⁷⁾とあることから、この頃に前田は飯田町3丁目9番地の北辰舎に移ってきたと考えられる。さらに、榎本と前田の関係は以前からあったものと考えられる⁴⁸⁾。敷地については1875(明治8)年には榎本が同土地を取得している⁴⁹⁾。

このように見ていくと、明治初期の搾乳業者の土地取得の背景には搾乳業の出資者層が地主として存在していることが明らかになってきた。搾乳業者の多くが、旧幕臣や旧士族であったことは先述した。小普請であった阪川當晴の「阪川牛乳」、榎本武揚の配下であった辻村義久⁵⁰⁾など彼らは近代初期における搾乳業の草分けとされている。旧幕臣が搾乳業に進出した理由には、先にも述べた幕府の奥医師、松本順とその周囲の存在があげられる⁵¹⁾。

また、河瀬のように政府高官による牧場経営も熱心に行われている。『牛乳史』によれば、松方正義、山縣有朋、由利公正などが搾乳所を経営している。その土地取得の経緯などから少なからず経営への関心も伺い知ることができる⁵²⁾。『牛乳史』の中で取り上げられ飯田町周辺にて経営していた搾乳所に山縣有朋の英華舎、松尾臣善の長養軒がある。彼らは、先述した搾乳業者よりもやや遅れて店舗を構えており、次にこの2軒の搾乳所について取り上げる。

英華舎の開業は判然としないが、1880(明治13)年より統計に表れる⁵³⁾。住所は三番町20番地に位置し、『御府内往還沿革図書』⁵⁴⁾と照らし合わせると、かつての旗本屋敷地を合筆した地であることがわかる。また、この合筆された土地の1筆を拝領していたうちの一人、山本徳五郎という人物は明治維新に際して徳川家とともに駿府に帰藩している⁵⁵⁾。つまり、維新後はこの地が空き家になっていた。「沽券図」に照らし合わせれば、升本喜兵衛が英華舎以前に同地を合筆して取得していたことが読み取れる。1878(明治11)年にはこの地の所有者⁵⁶⁾は旧尼崎藩主櫻井忠興に変わっているが、櫻井の住所は富士見町4丁目9番地にあり居住はしていなかったとみられ、そ

こに英華舎は借地して搾乳所を経営していたと考えられる。その後も所有は変わらず、明治末の土地所有者は息子の櫻井忠胤⁵⁷⁾となっている。英華舎は山縣が出資し、平田貞次郎が経営したといわれる⁵⁸⁾。1889(明治22)年の平田の居住地がこの三番町の住所になっていることから、借地居住し経営していたことが伺える⁵⁹⁾。この平田という人物について詳しい経歴はわからないが山縣の執事であったという記録がある⁶⁰⁾。さて、明治18年の英華舎の広告をみると、数寄屋町4番地に支店を、雑司ヶ谷町35番地に牧場を持っていたことがわかる。この牧場、搾乳所、販売店の分業方式は、その後、搾乳業者のなかで広まっていくことが資料などからうかがえる⁶¹⁾。

次に、松尾臣善が経営したとされる長養軒についてみていく。長養軒は『牛乳史』では、明治5(1872)年に松尾臣善が神田にて経営したとあり、実際の経営者は弟の松尾健次であったという。「沽券図」には南神保町1番地に松尾臣善の名前がある⁶²⁾。そして、この地における搾乳業開業許可の願いが明治5(1872)年に「松尾臣善方寄留人宇和島県管轄商人井上榮三郎」の名で、翌年には「松尾臣善附籍居村永太郎」の名で出されている⁶³⁾。このように、松尾の近親者や同郷の商人が開業願いの届けを出しているのは興味深い。長養軒の飯田町への移転は1880(明治13)年に行われたことが読売新聞の転居広告から読み取ることが出来る⁶⁴⁾。移転先の土地をみると1875(明治8)年に武田祐助が所有していた土地を一括して松尾しげなる人物が取得している⁶⁵⁾。そして、1878(明治11)年には松尾臣善が地主となっていることからしげは松尾臣善の親族であると考えられる。この飯田町の敷地は幕末期3筆の幕臣屋敷であったが、その後、土地され開墾地となっていたところを明治5年6月に武田に払い下げられていることが資料からうかがえる⁶⁶⁾。1878(明治11)年の「東京府統計表」をみると南神保町での搾乳業者名は松尾しげとなっており、1880(明治13)年には両住所とも代表者名は松尾千代となっている。また、松尾臣善はこの周辺の土地を多く取得しており、既にこの辺りの土地を集積して獲得していたことが伺える。

ここでもう一つ指摘したいのは、南神保町の長養軒の跡地である。1880(明治13)年にも松尾千代の名で搾乳所として記載されており、1883(明治16)年の新聞広告をみると同跡地に遠藤作治郎という牛乳販売店が入っている⁶⁷⁾。このように、搾乳所が移転した跡地に、別の搾乳所や牛乳小売店が入居する例もみられ、徐々に経営範囲を拡大している様子も窺える。

まとめると、山縣や松尾による経営は、1877(明治10)年頃から土地取得が先行して行われ、大規模な土地が得られた場所で搾乳業が始まる。長養軒の土地取得は維新後に土地され開墾場となった場所を払い下げにて入手した人物から、さらに土地を購入している様子が読み取れる。この土地取得の流れは、土地所有者と搾乳所の出資者が異なるが英華舎でも共通しているといえる。さらに、経営は本人ではなく代理の者が行っていた。そして、搾乳所以外の土地取得も積極的に行っており、彼らは殖産興業が進む中で新たな産業の出資者であり土地所有者であった。

6. 飯田町・番町への牛乳搾取場集積の要因

これまで述べてきたように飯田町への牧場移転は明治5(1872)年頃にはじまり、1877(明治10)年頃からさらに増えていく。その理由として、明治5(1872)年頃から東京招魂社の周辺に陸軍省の官員が

Fig.2-1 Sakagawa Gyūnyū, engraving published in 1885.

Fig.2-2 Sakagawa Gyūnyū, circa 1884 (The arrow indicates engraving orientation).

Fig.3 Hokushinsha, circa 1884.

居住するようになり、1874(明治 7)年には尾張徳川藩上屋敷の跡地に陸軍士官学校が開校したことが一つの理由として考えられる。

また、陸軍省だけでなく、外国大使館でも牛乳飲用は習慣であったためその周辺にも搾乳業者が多く集まった。外国人居留地のある築地には、日本の搾乳業の草分けである前田留吉の牧場があった。飯田町周辺は、陸軍省の施設が多く、近くには英国大使館もあり、搾乳業者の集積地となったと考えられる。それを裏付けるように陸軍省では、旧幕臣へ搾乳業を斡旋し牛乳を飲用することを推奨していた先述の松本良順が軍医頭として任命されており、任命には山県有朋の推薦があったことが伺える⁶⁸⁾。また、牛乳を飲むことを日常的に取り入れた新住民の集まるところに搾乳業者も集まってきていたといえる。小田内通敏は、東京における搾乳業社 14 戸中、麹町区に 4 戸が集まる理由を「其飲用者が當時在留の欧米人及歐風を慕ふ知識階級が同区に多く居住せし為」と述べている。

ところで、明治 10 年代後半の搾乳業の解説書には牛舎は「高燥の地」に建てるのが望ましいという表現が現れるようになる⁶⁹⁾。しかし、実際に飯田町・番町地域をみると旗本屋敷地は高燥といえる地であるが、搾乳所の立地は斜面地などにも多いことが読み取れる。未利用地としてあった比較的大きな土地を搾乳業者が求めたとも考えられるが、資料が乏しく結論付けるには難しい。

7. 明治初期における搾取場の空間構成

明治初期の搾乳業の様子を図版として知ることができる管見での唯一の資料が 1885(明治 18)年に出版された『東京商工博覧絵』という銅版画の広告である。この銅版画には 20 軒⁷⁰⁾の搾乳業社が描

かれており、Table2⁷¹⁾にそれらの幕末期の屋敷区分を調べまとめた。このうち所在地が大名屋敷や幕臣屋敷の跡地であるものは 18 軒である。大名屋敷が搾乳所になったものについては、維新後に合筆されたものもあるが、1885 年には全てで分筆されており、幕臣屋敷が搾乳所になったものについては多くが合筆されていることがわかる。搾乳所が広大な土地を求めたかということ、大名屋敷地は広大すぎたためか分譲した土地を取得して経営している事例ばかりであり、旗本屋敷地は出資者にとっても適当な土地であったことがうかがえる。

その中で、本稿にて扱った搾乳所は 4 軒あり、先の英華舎、長養軒、阪川当晴、猪俣要助の搾乳所が描かれている。そのため、これらの銅版画を詳細にみることで、番町・飯田町地域の変化と当時の搾乳所の空間を読み取ることができる。この 4 件の明治 11 年の坪数は順に 1960 坪、1474 坪、609 坪、285 坪となっている⁷²⁾。

これらの搾取業をみると、一つの敷地内で放牧場、搾乳所、販売所を兼ねていることが共通して読み取れる。そして、敷地内に放し飼いにされている牛が描かれていることから、余裕のある敷地で経営が行われていたことがわかる。また、敷地入り口の門は門柱のみか、切妻屋根が設けられているものが多く、その周囲の敷地は柵や生垣で囲われていることがわかる。搾乳所の販売形式の多くは配達であったというが、いずれも販売所が設けられ、その位置は看板や建物内の様子から街路に面した長屋か、門を入り敷地奥に建てられた建物で販売していたとみられる。

銅版画に描かれた様子がどの程度忠実に描かれているか、阪川の搾乳所を具体的に取り上げ、『参謀本部地図』と比較を行う。まず、銅版画では、手前の街路に人々が歩く姿が描かれ、中央の門をくぐると左右に牛が放し飼いにされる放牧場がある。(Fig.2-1⁷³⁾)敷地境界には柵が設けられ中に牛たちが放牧されている様子が街路からわかる。また、敷地内の建物についてみると、向かって右手側に牛たちの入る平面の非常に長い牛舎が描かれ、敷地奥に旗本屋敷の主屋を思わせる大きな建物が描かれている。これを『参謀本部地図』(Fig.2-2⁷⁴⁾)と比較すると、銅版画同様の配置で牛舎や主屋が描かれており、街路から門を入り左右に放牧地が設けられ柵で囲まれているところまで忠実に描かれている。さらに、両者に敷地内の井戸も共通して左手の放牧場に描かれていることも読み取れる。これらのことから、銅版画は正確に当時の様子を描かれていたといえる。

以上のことを踏まえ、銅版画に描かれる各建物について推察を行う。まず、主屋をみると正面に式台玄関のようなものが描かれ、旗本屋敷の主屋を想起させる⁷⁵⁾。旧武家地の建物をそのまま利用したか確かめる決定的な資料は管見ではない。『明治事物起源』の牛乳の項には明治初年に飯田町に開業した千里軒について記述があり「この主人は、中山道通ひの乗合馬車屋にして、牛乳を兼業としたるな

Table2 List of dairy farm locations by address, along with corresponding pre-Meiji designation, according to the Tōkyō Shōkō Hakuran'e.

社名	代表者	住所	旧区分
得盛舎		浅草区向柳原町1丁目4番地	大名屋敷分筆
四谷軒	佐々倉基三郎	四谷区麹町12丁目8番地	町人地
日新社	守屋繁次郎	神田区三崎町1丁目12番地	幕臣屋敷合筆
猪股組	猪股要助	麹町区富士見町4丁目12番地	幕臣屋敷
	長谷川石造	芝区高輪南町30番地	町人地合筆カ
	吉羽福太郎	牛込区笹舟町30番地	幕臣屋敷
	木村義政	四谷区永住町1番地	大名屋敷、合筆、分筆
	和川直道	神田区美土代町2丁目1番地	幕臣屋敷、合筆、分筆
	真砂舎	本郷区真砂町34番地	大名屋敷分筆
	川崎弥太郎	神田区猿樂町1番地(丁の記載無)	大名または幕臣屋敷
	矢作長兵衛	小石川区林町38番地	幕臣屋敷合筆カ
	横井弘勝	本郷区本郷真砂町37番地	大名屋敷分筆
	梅原要助	牛込区新小川町2丁目10番地	幕臣屋敷合筆
	前田源太郎	新富町2丁目2番地	大名屋敷分筆
英華舎	平田貞次郎	麹町区三番町20番地	幕臣屋敷合筆
	森勘十郎	牛込区白銀町35番地	幕臣屋敷合筆
	今井良三	牛込区市ヶ谷本村町16番地	幕臣屋敷
長養軒		麹町区飯田町5丁目30番地	幕臣屋敷合筆
阪川牛乳	阪川当晴	麹町区五番町17番地	幕臣屋敷
	杉田榮	麻布区筈町23番地	大名屋敷分筆

りければ、家は玄関構にて、袴を着けたる玄関番をおけり」とあり、こちらにも旗本屋敷の転用も示唆している⁷⁶⁾。しかし、『独立自営営業開始案内 第3編』には千駄木林町の牧田義雄が今住んでいる家は「昔の旗本か侍医でもあろうかと思はるる邸宅を構」えているが、当初の敷地は「見すばらしい長屋」が一軒あるだけであったという。このことから、新たに旗本屋敷の構えを持つ建物を再建したことが伺える。

このような主屋を利用していた理由としてその利用の容易さと購入した土地に建物がそのまま残っていた可能性があげられる。維新政府の上地は官員住居の確保を目指し、勝手な取り壊しを禁じていたことから、建物転用については十分に考えられる。さらに、この地域の旗本屋敷地には各戸に井戸が設けられていたことが読み取れ、牛の飼育にも適していた場であったと考えられる。

一方で、旧旗本屋敷地からの変化として表長屋の撤去があげられよう。一般的な武家地の類型としては表長屋が街路に面して建てられるが、阪川牛乳については撤去され外から中を見ることが出来る柵に置き換えられている⁷⁷⁾。しかし、銅版画に描かれる8軒の店舗で街路に面した建物をみることができる⁷⁸⁾。牛乳の販売店として使用され、押縁下見板の外壁に瓦屋根を乗せたものや長屋門のような建物も描かれており、表長屋の転用も考えられる。表長屋が明治以降開かれていく様子については松山恵氏が指摘しているように、この当時の変わりつつある武家地の姿であったと考えられる⁷⁹⁾。(Fig.3⁸⁰⁾)

最後に、牛舎について述べる。牛舎は、販売店の奥や街路に面するもの様々であるが、形態としては押縁下見板張りの長屋のような建物が傾向としてみられる。多くは下屋が付いており2階層程の高さがあることも読み取れる。屋根は切妻や寄せ棟の瓦屋根か板葺屋根で、煙出しや煙突が付いているものもあり、換気に気を使っていることから、牛舎は衛生面を考慮して新たに建設されたものといえる。1886(明治19)年に改正施行された「牛乳営業取締規則」では、搾乳業者の把握や衛生面に関する対策が述べられているが、建物の構造に関する規制はまだ見られない⁸¹⁾。だが、一列に並んで牛の入る牛舎の建築形式についてはある程度共通の考えが普及していたといえよう。

以上のように旧武家地での搾乳業は旗本屋敷の転用と考えられる建物を残しながら、敷地の残余地に牛舎や放牧場を新たに設けていたことが読み取れた。

8. 結び

飯田町・番町のエリアを通して明治初期に新たな産業として拡大した搾乳業の空間をみてきたが、旗本屋敷の跡地がそのまま搾乳所になる例だけでなく、土地を合筆して搾乳所としている例も多くみられた。他の地域では分筆された大名屋敷跡地で搾乳業が展開していることから、旗本屋敷地が搾乳業にとって適当な規模として見いだされていたことが推定できる。また、旗本屋敷地は維新後に新政府に上地された後の払い下げにより入手した新規の土地所有者が多く、新たに土地や建物を取得しやすい土壌があったこともうかがえる。

搾乳所として土地取得が行われる以前に上地された旗本屋敷地を払い下げで入手している新規土地所有者がおり、それらの土地を搾

乳業の出資者が取得していく過程が把握できた。搾乳場の土地所有者となった者の中には勸業寮の官員など殖産興業を推し進める政府官員の姿がみられ、実際の経営には旧士族や旧農家の者などがあっていた。その実際の経営を行った者が次第に独立し、新たな土地所有者となっていく様子もうかがえた。

さらに、旗本屋敷地の空間利用については、主屋において旗本住居とみられる式台玄関付きの形式を継承しながらも、表長屋の撤去や商店化により旧幕時代より開かれた空間が現れていたと推測できる。

その後、1900(明治33)年の牛乳営業取締規則により搾乳業者の多くが郊外へ移転するが、それまでの搾乳所を販売店に変えるなどして、都心での牛乳販売の販路を確立している。今回、触れる頃が出来なかった分業形式により明治20年代から牧場と搾取場が分かれ本郷区や内藤新宿、駒込に牧場が集まる様子や殖産興業により発展した他の産業と旧武家地空間との関係については次稿の課題とした。

注

- 1) 栗原藤七郎「乳産業の形成過程における搾乳業」(『農村研究』東京農業大学農業経済学会 1962 年)や松尾幹之『畜産経済論』(お茶の水書房, 1960 年)など。
- 2) 「東京府統計書」1900(明治33)年, 国会図書館蔵
- 3) 青鹿四郎『農業地理経済』(農山漁村文化協会, 1980 年), pp. 125-127(1935 年に出版されたものの復刻版を用いた)
- 4) 前掲3)『農業地理経済』p. 126
- 5) 「東京府統計表」1878(明治11)年, 国会図書館蔵
- 6) 「東京府統計書」1883(明治16)年, 国会図書館蔵
- 7) 陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房, 1985 年
- 8) 吉田豊『牛乳と日本人』(新宿書房, 1988 年), pp. 94-97
- 9) 旧幕臣の処遇については、『静岡県史』通史編5 や安藤優一郎『幕臣たちの明治維新』(講談社現代新書, 2008 年)に詳しい。
- 10) 『静岡県史』通史編5, 1996 年, pp. 17-18
- 11) 前掲8)『牛乳と日本人』や加茂儀一『日本畜産史』(法政大学出版局, p. 344) など。
- 12) 川崎房五郎『都市紀要十三 明治初年の武家地処理問題』東京都, 1965 年
- 13) 『東京市史稿』市街編53, p. 130
- 14) 松山恵『江戸・東京の都市史近代移行期の都市』(東京大学出版会, 2014 年)や加藤仁美「明治期の大名屋敷跡地の住宅地開発について-麻布霞町と本郷西片町の比較」(『日本建築学会関東支部報告集』1993 年)など。
- 15) 前掲9)や樋口雄彦『幕臣たちは明治維新をどう生きたのか』(洋泉社, 2016 年)などの研究があげられる。
- 16) 武田尚子『ミルクと日本人』中公新書, 2017 年
- 17) 矢澤好幸「明治期の東京に於ける牛乳事業の発展と経過の考察」(『乳の社会文化学術研究研究報告書』2014 年)など。
- 18) 仲宇佐達也『東京農業史』けやき出版, 2003 年
- 19) 加茂儀一『日本畜産史 食肉・乳酪篇』法政大学出版, 1976 年
- 20) 前掲3)『農業地理経済』および、小田内通敏『帝都と近郊』(有峰書店, 1974 年(1918 年の大倉研究所出版の復刻版を用いた。))
- 21) 「六大区沽券図」1873(明治6)年, 東京都公文書館蔵
- 22) 「地価取調帳」1878(明治11)年, 東京都公文書館蔵
- 23) 『参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』日本地図センター, 1984 年(明治16、17 年測量図の復刻版を用いた。)
- 24) 深満池源次郎編『東京商工博覧絵第貳編上・下』1885 年
- 25) 牛乳新聞社編『大日本牛乳史』牛乳新聞社, 1934 年
- 26) 金田耕平『日本牧牛家實伝』丸屋善七, 1886 年
- 27) 前掲25)『牛乳史』に同じ。
- 28) 『江戸』第壹巻第参綴(江戸旧事采訪会, 1915 年), p. 9
- 29) 那須、小金井の開墾については椿真智子「近代日本におけるフロンティア景観と近代的表象-三里塚牧場を事例に-」(『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』海青社, 2007 年)などに詳しい。
- 30) 前掲25)pp. 224-225 同資料には、明治3年には4軒で、明治5年に1軒増加して5軒となったとの記述もある。

31)前掲 16)『ミルクと日本人』にて経緯について触れられている。

32)『東京実測全図』(内務省地理局, 1885 年, (1999 年の柏書房の復刻版))をベースに作図。

33)表中の*は以下の資料を参照としている。*1 前掲 23)『大日本』, *2 前掲 21)「六大区沽券図」, *3「地券帳」明治八年, 東京都公文書館蔵, *4 前掲 22)「地価取調帳」*5 前掲 22)『東京商工博覧絵』, *6 前掲 26)『牧牛家』, *7『三府及近郊名所名物案内』日本名所案内社, 1918 年, *8『東京府農商工要覧. 第 3 回』東京府農商課, 1891 年, *9, *10『東京府農商工要覧. 第 2 回』東京府農商課, 1889 年。

34)前掲 25)『牛乳史』阪川の開業したという赤坂の住所については明らかでない。

35)柴田宵曲編『幕末の武家』(青蛙房, 1965 年), p. 218

36)雑誌『肉と乳』第 6 巻 1 号(1915 年)には「旧幕の遺臣達にして後ち頭官たりし人々に依つて明治三年始めて組織されたる『牛乳商社』をして(中略)一婦人の身として能く堅忍持重し、當晴氏が二人の遺孤と共に邁進したために今日の成功を得たとある。この会社設立について詳しく書かれた資料は見当たらない。

37) 前掲 22)「地価取調帳」また、『牧牛家』に右京町の記載があるが、実際には四谷塩町 3 丁目の一部が飛地で右京町と隣接するため、実際には塩町であったと考えられる。

38) 前掲 20)『帝都と近郊』ただし、著者がどのような資料に基づいて書いているのか不明である。

39) 前掲 25)『牛乳史』p. 229 に「廃藩置県で、禄を取り上げられた」と記載しているが、実際には 1876(明治 9)年に秩禄処分が行われたことから、秩禄処分後を指していると考えられる。

40)遠山景澄編『京濱實業家名鑑』京濱實業新報社, 1907

41)「四小区地価下調帳」明治 11 年, 東京都公文書館蔵

42)明治 11(1878)年 10 月 22 日の『読売新聞』に広告を出しているが、富士見町 5 丁目 7 番地は借地であったため、富士見町 4 丁目 12 番地を買い取り移転したとある。

43)『読売新聞』1888 年 9 月 8 日

44)『読売新聞』1889 年 7 月 6 日

45)『読売新聞』1877 年 7 月 25 日

46)『読売新聞』1876 年 8 月 21 日

47)前掲 25)『牛乳史』

48)前掲 17)によると前田留吉と榎本武揚は子息が婚姻関係を結び親族となっており、前田留吉の遠戚である前田喜代松とも関係があることになる。また、同書には搾乳業の阪川當晴、和田半次郎、前田源太郎、牛乳飲用を広めた松本良順も親族関係があったことが述べられている。

49)「地券帳・利・自飯田町 1 丁目至同 6 丁目・4 ノ上」麹町区役所, 1875 年, 東京都公文書館蔵。また、「東京府統計表」(1880(明治 13)年, 国会図書館蔵)に載る搾乳業者をみると、明治 12 年まで前田喜代松、平田貞次郎の記載はなく明治 13 年の統計より記載が確認される。

50)『牧牛家』によれば、辻村は幕末に彰義隊に加わった後、函館まで榎本武揚に従いその後捕らえられたという経歴が書かれる。

51)松本良順との繋がりには『牛乳史』によると多くの旧幕臣が影響されていることが述べられている。また、同書によればその後旧藩主たちが搾乳業を経営するようになるのは廃藩置県の影響があったことが記載される。

52)下板橋の由利牧場については金沢藩邸の拝借から土地取得に至までの回議録が残されている。これについては時代と場所が少しずれるので、別稿に述べたい。明治初年に前田留吉を牛馬会社と呼び寄せたのは由利とされている。前掲 26)『牧牛家』によれば同じ福井藩士の團野精も由利と計って搾乳業を開いたとされる。

53)前掲 49)「東京府統計表」

54)『御府内往還其外沿革図書』文久二年のものと『諸向地面取調帳』の坪数

を参考にした。

55)樋口雄彦「小普請の軍事的再編と静岡藩勤番組への帰着」(『国立歴史民俗博物館研究報告』126 集, 2006 年)

56) 前掲 22)「地価取調帳」

57)『地券台帳・地券地図〔東京〕』(地図史料編集会, 1989 年のものを用いた。)

58)前掲 25)『牛乳史』p. 228 には平田貞次郎の後に名義を山縣の息子の伊三郎の名に変えたとある。

59)「河岸地顧問届録」明治廿二年, 東京都公文書館蔵

60)「地主代理書類」明治十一年十一月, 東京都公文書館蔵

61) 1887(明治 20)年の『東京府統計書』より新たに「販売業」者数の統計が行われ「搾取業」者数と分けて統計が記載されることから、このころに分業が増えたことが推測される。

62)前掲 21)当該敷地は 146 坪、31 円

63)『東京市史稿』市街編 54, pp. 1002-1015 に 1873(明治 6)年に出された牛乳搾取並牧畜許可の願出がまとめられている。

64)「地券帳・利・自飯田町 1 丁目至同 6 丁目・4 ノ上〈麹町区役所〉」明治 8 年, 東京都公文書館蔵、松尾しげは武田祐助の所有地 3 筆を購入している。また、松尾臣善も 3 筆の土地を土手沿いに入手している。

65)1880(明治 13)年 5 月 18 日付の『読売新聞』に轉居広告が掲載され、南神保町 1 番地から飯田町 5 丁目 30 番地へ移転したことがわかる。

66)「地券御下渡願」(明治 5 年(1872)年, 東京都公文書館蔵)において武田は、周辺の開墾地(場)となっていた土地を払い下げて手に入れていることが窺える。武田については現時点で詳しくわからないが、同様にこの地域において開墾地を払い下げて入手している三好十郎平や斎藤貫一郎といった新たな地主層が登場していることが指摘できる。

67)1883(明治 16)年 8 月 29 日付の『読売新聞』の広告に遠藤作治郎という名前で、南神保町 1 番地の住所が使われている。新栄町の嶺岡牧舎出張所と共同で掲載している。

68)『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社, 1980 年(復刻版), pp. 81-83

69)加藤懋、桂弥市編『重脩牧牛手引草』農商務省農務局, 1884 年

70)猪俣要助の頁には猪股組の記述があるため Table2 においては 20 軒全てを取り上げた。

71)前掲 24)『東京商工博覧絵』をもとに作成

72)前掲 22)「地価取調帳」に記載の坪数から坪未満を切り捨てとした。榎本武揚の所有地には崖地 143 坪の記載があり、『参謀本部地図』を見ると斜面を取り込んだ崖下の土地であることがわかる。

73)前掲 24)『東京商工博覧絵』

74)前掲 23)『参謀本部地図』を元図に使用

75)旗本屋敷のような主屋が描かれているのは、横井弘勝、長養軒、阪川當晴、矢作長兵衛の 4 軒。

76)石井研堂『明治事物起源』春陽堂, 1926 年

77)平井聖・波多野純『江戸城Ⅱ』至文堂, 1996 年

78)銅版画から街路に面した販売店を確認できるのは、前田源太郎、森勘十郎、英華舎、長養軒、四谷軒、得盛舎、日新社、今井良三の 8 名(社)である。所在地については Table2 参照。ただし、本統計には旧町人地に属する搾乳所も含むため、今後具体的な検証が必要である。

79)松山恵「明治初頭における東京の居住-近世近代移行期における江戸、東京の都市空間(その 2)-」(『日本建築学会計画系論文集』第 562 号, pp. 309-316, 2002 年 12 月)によって明治以降かつての表長屋が転用され商店化する様子が明らかにされている。

80)前掲 23)『参謀本部地図』を元図に使用した。

81)須原鉄二『東京警視本署布達全書. 明治 18 年』1886 年

ON THE TRANSFORMATION OF TOKYO URBAN SPACE THROUGH THE CONVERSION OF FORMER RETAINER RESIDENCES INTO DAIRY FARMS IN THE EARLY MEIJI PERIOD:

A case study of dairy farms in Iidamachi and Bancho

Masataka KANAYA *¹

*¹ Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng. & Design, Hosei Univ., M.Eng.

The purpose of this thesis is to study transitions of former samurai residences during the early Meiji period. It relies on the analysis of Japanese dairies, a new industry established at the onset of the after Meiji Restoration in Tokyo, that eventually spread nationwide due to industrial development policies affecting former samurai residences. By studying patterns on the acquisition of land and management of dairies, then analyzing the space of dairy farms run in the former samurai district, which was drawn in the copperplate prints, we clarify the transformation of Tokyo urban space in the early Meiji period. It is revealed that dairies in Japan developed rapidly in urban areas prior to their establishment in rural settings, a developmental process opposite to dairies overseas. In this paper, we focus our attention on dairy farms that concentrated from 1872 in Iida-machi and Bancho districts, where many many shogunal retainers (Hatamoto) had lived during the Edo period. It is said that there were many former retainers in the milking business owners, but it became clear that there were investors such as government officials in the land acquisition of the dairy farms in the Iidamachi and Bancho area. In what concerns the management of the new industry, two phase can be identified.

First phase, from 1872. Dairy farms will be gathered around Iidamachi and Bancho.

The new landlords, taking advantage of the new Meiji government decrees on land sale, acquired several former shogunate residences, and relatively large estates were consolidated as a consequence. The dairy owner get the land. Furthermore, this paper also revealed details of the relationship between landlords and managers of dairies. An example of this: Yosuke Inomata became a butler of Hideharu Kawase, Feuder retainer of Miyazu domain, in 1872 and started a milking business at the land of Kawase. After several relocations, he became independent in 1876, then acquired the land of Fujimicho 4-chome(between Iidamachi and Bancho) in 1878.

Second phase. From 1877.

Meiji government officials were actively doing land acquisition and started to establish dairy industries. In Bancho and Iida-machi, Aritomo Yamagata and Shigeyoshi Matsuo acquired vast land. But the managers were their deacons and relatives. As urbanization progressed, a new scheme was introduced to transfer the ranch to the suburbs, bringing the cows in the milking phase while leaving the dairy intact.

Then, We analyzed after former Samurai space detailed from the published copperplate prints of the dairy farms. In some of the dairy farms depicted, the Nagaya and the Omoya were used as milk store. On the other hand, in some prints, the Nagaya was removed, and fences were created at the boundaries of the site to be a space where the inside could be seen. Spatial arrangement of dairy farms, thus, was closely related to the space of former samurai residences with the sole additions of industry dedicated edifices, like livestock buildings and pasture grounds.

In summary, ownership of former samurai land was traded dynamically and new industries flourished actively. As a result, even while some existing buildings were kept amidst new structures such as cowsheds and grazing grounds, the formerly off-limits retainer residences of the Edo Period were opened to commoners during the Meiji Period, as nagaya barracks were torn down or converted into outward-facing dairy retail stores.

(2020年7月9日原稿受理, 2020年12月1日採用決定)